

「迷いの人生にピリオドを打つ—人間を探し求める神 イエス・キリスト」マタイの福音書 18 章

東住吉キリスト集会 高原 剛一郎 氏

\*---\*---\*---\*---\*---\*---\*---\*---\*---\*---\*---\*---\*---\*---\*---\*

見たい見たいと思いながら、とうとう上映終了してしまった映画があります。

『GOGO (ゴゴ) 94 歳の小学生』というケニアのドキュメンタリー映画で、これは作り話ではなく、カメラを現場に持ち込んで回している映画です。

ケニアのカレンジン語で“ゴゴ”は“おばあちゃん”という意味です。主人公のおばあちゃんは 94 歳。現役の助産師。十代の頃に結婚して、32 歳でご主人が亡くなったのですが、子供が 3 人いました。この 3 人から 22 人の孫が生まれます。そして、22 人の孫から 52 人の曾孫が生まれます。この曾孫の中に、学齢期に達しているのに学校に行っていない子たちがいることに、ひいおばあちゃんのゴゴが気付きました。

ゴゴも小学校に行かせてもらえませんでした。つまり、読み書きが出来ないということです。

そのことで、今までどれほど不自由して来たか、不便だったか分からない。

曾孫までそんな目に遭わせたくないと思って「あんたら、学校行き。」ただ、そう言っても行かないでしょう。そこで、ゴゴばあちゃんは曾孫 6 人連れて、94 歳で小学 1 年に入るんです。

「歳取り過ぎ！」ということで、初めは校長先生から断られるけど、94 歳で勉強を始めて読み書き出来るようになったら、他の人たちの励みになるじゃない。粘りに粘って入学許可を得ました。

それで、他の小学生たちと全く同じように、寄宿舎に入って 寝起きして 制服着て。

教えてくれる先生は校長先生含めて全員、自分が産婆さんとして取り上げた子供たち。

だけど 94 歳。目悪い。耳遠い。物覚え悪い。それにケニアの小学校は、卒業する時に卒業試験を受けないと駄目なんです。さあ、どうなるのか?! これが映画のクライマックスに当たる部分ですよ。

世界的にすごく評価が高くて、生きる勇気を与える映画として注目されてるんですね。

映画館で見たかったんですが、間もなくネットで見る事が出来ると思います。

彼女は 94 歳になってから、一から読み書きを勉強する。今まで読み書き出来なくて不利だったというのは分かるんだけど、94 歳だから 200 年も 300 年も生きないでしょう。読み書きなしで 94 歳まで生きれたのなら、もうあとわずかなんだから、今から苦労しなくてもいいじゃない。

ところが、彼女にはどうしても読みたい本があった。聖書ですよ。

このおばあちゃんはクリスチャンなんですね。私を造り・この世界を造り・私のために十字架に掛かって、私の罪の償いをしてくださったイエス・キリストを信じている。だけど、キリストのことを考えたり、また知ろうとする時はいつも、人から説明を聞かない限り分からない。

聖書に何が語られているのかを、自分で読むことが出来ない。ああ、自分で知りたい。

私を愛してくださる神様の言葉が聖書。なら、私は自分で聖書を読みたい。

その一心で、94歳から読み書きを始めたのです。彼女がそのような情熱を持つというのは、ある意味当然です。

聖書は本当に分かったら、こんなに嬉しい書物はありません。こんなに人に勇気と命を与える書物はありません。あなたを造り、愛している方の本心が、聖書の中に書いてあるんですね。

神様の愛について、包み隠さずに語っています。

そこで今日は、聖書の代表的なイエス・キリストのたとえ話の中から、神様があなたをどのように思っておられるのかについて、一緒に考えたいと思います

#### マタイ 18:12-14

12. あなたがたはどう思いますか。もしある人に羊が百匹いて、そのうちの一匹が迷い出たら、その人は九十九匹を山に残して、迷った一匹を捜しに出かけないでしょうか。
13. まことに、あなたがたに言います。もしその羊を見つけたなら、その人は、迷わなかった九十九匹の羊以上にこの一匹を喜びます。
14. このように、この小さい者たちの一人が滅びることは、天におられるあなたがたの父のみこころではありません。

天におられるあなたがたの父・全知全能の創造主なる神様は、あなたが滅びることを全く望んでいません。その神の心を示すために、イエス・キリストが1つたとえ話をされたんですね。

百匹の羊がいて、一匹が迷子になってしまった。

その迷子の一匹を捜すために、羊飼いが捜し歩かないだろうか。

これね、動物の世界にも、出来の良い動物と出来の悪い動物があるんです。

盲導犬、全ての犬が盲導犬になれるわけじゃないんですよね。

警察犬、全ての犬が警察犬になれるわけじゃない。適性があるんですね。

ここで登場する羊。99匹が迷うけど1匹だけ迷わない羊なら、すごく出来が良いじゃないですか。

みんなが迷うような山や荒野で、1匹だけ迷わないで、ちゃんと羊飼いが言った通りに動くことが出来るのは優等生です。

だけど、100匹のうち99匹が迷わない所で、1匹だけがキレイに迷う。みんなが間違わないような所で間違う。みんなが迷わないような所で迷う。みんなが落ちないような所で落ちて行く。

特別不器用な羊。こんな不器用というか、わきまえのない羊は、集団で行動する時にはむしろ足手まといになるので、率いて行く者にすれば、いない方が仕事の負担が少ないと思います。

が、羊飼いはそう考えません。もし100匹のうち1匹が迷ったら、99匹を置いてでも、その1匹を捜し歩くではないか。つまり1匹は1/100の価値ではなく、99匹とイコールですね。

いや、ここでは、それよりも上になっているじゃないですか。

これね、親になると分かります。子供が産まれる。一人っ子。めちゃくちゃ可愛い。

下が産まれます。兄弟になります。子供が2人。その時に親の愛情は  $1/2 \cdot 1/2$  になるでしょうか。そうじゃない。一人っ子に対するような思いが2人にあるということです。3人目が産まれたら  $1/3 \cdot 1/3 \cdot 1/3$  になるでしょうか。そうじゃない。最愛の人が3人いるんです。効率じゃない。

神様の前には、居るべきところから離れてしまった羊になぞらえられた人間が、何とも愛おしく、何とも不憫で、何とも心配な対象。

神に対していつも優等生の生き方をしている人間ではなく、むしろそれを捜し求める神。

旧約聖書・ユダヤ教の中には、罪人が悔い改めたら神がそれを受け入れる、という考えや話がたくさん出て来ます。でも、神の方が罪人を捜し求めて、ずーっと捜し続けておられる姿で描かれているのは、このイエス・キリストのたとえで初めて明らかになったことなんですよ。

12. あなたがたはどう思いますか。もしある人に羊が百匹いて、そのうちの一匹が迷い出たら、その人は九十九匹を山に残して、迷った一匹を捜しに出かけないでしょうか。

2 回同じ単語が出て来ます。“迷う”という言葉。迷うとは、どんな状態を指すのでしょうか？

3 つのことが分からない状態です。

### 1. 自分がどこから来たのか見失っている人が“迷った人”

迷子とは、自分のスタート地点を忘れてしまった人のことです。自分の家がどこか分からない。どこから来たのか分からない。自分のルーツが分からない。どこから落ちたのかが分からない。解決はルーツを思い出すことです。

私はどこから来たのか。私の存在は何に由来しているのか。私はどこから落ちたのか。

昨年 朝日新聞系の雑誌の『アエラ』で、大人の引きこもりから脱出できた人たちをシリーズ連載していました。この引きこもり問題は国家的問題になりつつあるということで、色んな方が引きこもり状態から脱出できた体験談が記事となって残っています。

私の印象に残っているのがタキモト ユウキさん。25歳の男性です。

彼は7年間 引きこもっていました。自分の部屋に閉じこもって、親とも一切顔を合わせない。

部屋を出るのはトイレの時だけ。それと、ドアの前に置かれている食事をスッとお皿ごと取る時だけ。だけど7年後、誰の助けも借りずに、なんと部屋から出て来るんですよ。

まずリビングに行って、鏡に映っている自分を見て「うえ〜っ！」めっちゃくちゃ太ってた。

彼は非常に背が高いんです。以前は63キロ。高身長で63キロなのでガリガリでした。

ところが今見たら、髪の毛伸び放題。しかも白髪混じってる。髭も伸び放題。横幅めちゃくちゃでかい。めっちゃ太ってる。どないなってる？ 恐る恐る体重計に乗ったらエラーと出る。

その体重計は100キロオーバーするとエラー。つまり100キロをはるかに超えてるんですよ。

7年間 こんな状態になっていることが申し訳なくて、出ようとするんだけど出ることが出来ない。

焦り・もがき・情けなさの中で、自分自身を責める思いでいっぱいなので、自分の姿を鏡で見るとか

身なりを気にするとか、そんな余裕は全然ない。それで汗がブワッと出て来た。  
風呂場に行って、シャワーでザーッと汗を流して、裸の体にバスタオルを巻いて、得意だったピアノの前に座ります。「前はもっと上手かったのに」とか言いながら弾いていた。

その時、買い物から帰って来た母親が7年ぶりに自分の息子を見たんですよ。  
同じ屋根の下に生活していながら、7年間 姿を1回も見ることがなく、ましてや喋ったことがない。  
7年ぶりの会話。お母さん、最初に何と言ったと思いますか？ 第一声、「なんで、裸なん？」  
これ、ちょっと生々しいと思いませんか？ 「良かったなあ！」とか「治ったんやね！」ではなく…、  
「なんで、裸なん？」現実って、こんなもんかもしれないね。  
それはともかく、それから真夜中に母親と散歩するようになり、数か月で30キロ以上ダイエット。  
今は、引きこもりの問題で苦しんでいる人たちのために講演をしているそうです。

なぜ、7年経った時に出て来れたんでしょう？自分はどこから落ちたのかを考えたからだそうです。  
彼はある地方に住んでたけど、浪人が決まった時、東京に下宿して有名予備校に行くことにしました。  
下宿は彼のおばあちゃんの家です。祖母の家に同居して予備校に通うことにしたけど、このおばあちゃん  
が非常に粘着質というか、非常にネガティブな人生観の持ち主で、のべつ幕なしに愚痴を言う。  
その内容は「生きてたって仕方ない。人生なんて意味がない。生きてたって良い事なんか起こらない。」  
ひと言で言うと、人生を呪うおばあちゃん。命を否定する。人生を憎んでいる。  
そんなことばかり言うてたら、人は近付きませんよ。近付いてない。

ところが、孫が予備校に通うために同居することになった。孫を相手に、ずーっと四六時中 のべつ  
幕なしに、人生を呪うような言葉を延々と言い続けている。  
それをずーっと聞いているうちに、彼は自分の感情をコントロールすることが出来なくなり、おばあ  
ちゃんを憎むようになり、それだけでなく、殺意を抱くようになるんです。「おばあちゃんを殺そう。」  
世話になっている身でありながら、おばあちゃんの口から出て来る言葉は、感受性の豊かな彼には、  
言葉による虐待みたいだった。「このままだと、おばあちゃんを殺しかねない」となった時、それが  
きっかけで引きこもるんです。

彼は7年間、治そう。治そう。何とか出て行こう。出て行こう。表面的なことばかりやっていた。  
だけど、そもそも、なぜそうなったのか。私はどこから落ちたのか。根本原因は何だったのか。  
それを考えた時、これ以上愚痴を聞きたくない。そうすることで自分を守る。  
同時に、引きこもることで、おばあちゃんを殺（あや）めずに済む。  
つまり、自分とおばあちゃんを守るための引きこもりだった。ということに気が付くんです。  
引きこもりを肯定することによって、引きこもりから脱出する。  
というか、引きこもりの肯定ということは、自分自身を受け入れるということですよ。

それはベストの方法ではなかったけど、あの時の私には もう精一杯だったんだ。もっと酷いことを  
やらかそうとしていて、そうしないように、間違っているかもしれないけど、不器用な私が取った 決  
定的な大犯罪に至らないための選択だったんだ。これをゴクンと飲み込めた時、「もう引きこもる必  
要がない。引きこもった原因が分かったから。」それで出て来たよ。

どこから落ちたのかという問題が分かったら、その結果出て来ている問題を乗り越えやすくなる。

迷っているって、どういう問題ですか？

どこから出て来たのか・どこから外れ出したのか・どこから落ちたのかがよく分からない。

イエス・キリストは人間を迷っている羊にたとえました。

羊が羊飼いの元から離れている迷子の羊であるように、人間は人と共に歩むべく造ってくださった神から離れて生きている。自分のルーツを忘れて、“創造主なんかいない”という人生観で生きている。この状態を聖書は罪と語るのです。

もう1つご紹介したいのですが、数年前アメリカで、カーリーナ・ホワイトという黒人女性が23年ぶりに自分の両親と再会を果たした、というニュースがありました。

彼女は保育器の中でスヤスヤと眠っていたのに、病院に侵入した何者かが、生後19日目の彼女を連れ去ったのです。朝 看護師が見たら、1つの保育器の中に赤ちゃんがいてない。

大変だ！病院の中で赤ちゃんの誘拐事件！

これはもう大事件になって、テレビでもバンバン報道され、カーリーナさんの両親がテレビに出演して「娘を返してください！」と訴えたけど、23年間何の返事もなく、消息を絶ったまま迷宮入り。

実は、カーリーナさんは誘拐犯の娘として、ネドラ・ナンスという全然違う名前です。

だけど彼女にとって、その23年間は地獄のような。なぜかという虐待されていたんです。

虐待するんやったら、なんで子供を誘拐するの？

そこそこ大きく育てて、何か自分を養わせるために利用しようと考えていたのかもしれませんが。

彼女は「この人が自分の母親でなかったら、どんなに良いだろうか！」と思いながら過ごしたと。

というのは、犯人の黒人女性アン・ペットウェイは薬物中毒で、まともに働けない。

しかし、クスリのお金が欲しいので万引きの常習犯。刑務所を出たり入ったりしている。

子供心に「こんな大人になりたくない。私はこの人の娘なのか…」と考えるたびに、絶望的な気分になっていたのですが、転機がやって来ます。

カーリーナさんは16歳の時に妊娠しました。

それで、自分の出生証明書を母親に求めたら逆ギレするんですね。「なんで、そんなものが今頃いるんだ！それを調べてどうするんだ！」「子供の戸籍が…」「そんなこと、知ったことじゃない！よく聞け！お前は私の娘なんかじゃない。お前の父親はムチャクチャな男で、外に女つくって出て行った。それがショックで、お前のお母さんは死んでしまった。夫婦揃って、どうしようもないクズ人間だ。誰もお前を引き取らなかったから、私が引き取ってやったんだ。」

本当は自分が犯人なのに、自分がしたこと全部言い換えて、実の父母の悪口をいっぱい言って逆ギレ。怒って暴れ出すと 何するか分からない人だったので「今は静かにしよう。」

数年間我慢し、満を持して家出して、子供と生活しながら、行方不明児童センターに通うんですね。全米のデータが集まっているのをずっと調べて行く中で、23年前に病院から誘拐された赤ちゃんの

写真が出て来たんです。それを見ると、自分そっくりなんですよ。

どれくらい似ているかというところ、”これが私でなくて他に誰なの？”というくらい。

そして、赤ちゃんを失くして途方に暮れている夫婦に連絡し、DNA鑑定で紛れもなく親子であることが分かったんです。本当の両親のところに帰ってから、両親の援助で教育を受け直し、自分の娘も良い教育を受けられるようになりました。

皆さん、彼女の不幸はどこから始まりましたか？本当の親から切り離された、というところからです。そして、本当の親に対する誤った情報を信じ込まされることによって、親を求める気持ちが何回も萎えそうになるけど、しかし、彼女は諦めませんでした。

私はこの話を聞きながら、今の人間の問題のひな型のようにも思えて来たのです。

全ての人類の最初の男と女はアダムとエバです。

アダムとエバが悪魔にそそのかされて、創造主なる神様から離れました。

そして、悪魔の世界観に基いて、もし神がいたとしても、その神はバチを与える神。罪人を嫌って呪う神。人間の不幸を楽しんでいる神。

或いは、そんなものは迷信で、神なんか無いという考え。

無神論か、歪んだ神概念か。それによって、多くの人々が聖書の神に行かないのです。

「そんなものに救いはない。俺には俺の神がいる。それは誰や？俺や！」

人間は自分が拝むものの奴隷です。

金を拝んでいる人は金の奴隷。薬物を拝んでいる人は薬物の奴隷。自分を拝んでいる人は自分の奴隷。

私たちのルーツは私たちではありません。私たちは誰かによって造られたんですね。

私たちを造ってくださった方・創造主・魂の親である方がいます。それが聖書が語っている創造主。

あなたの魂の親。あなたを愛し、あなたを神のかたちに似せて造った方がおられるのです。

これを見失っている時、私たちは迷える羊になっている。

人はどんな時に迷っているのか。迷っているというのは何が分からない状態なのか。

## 2. これからどこに向かって行くのかが分からない人

ゴール/帰るべき家がどこにあるのかが分からない人です。とにかく目の前のことで一生懸命生きているけど、私たちは最終的に死にますね。死んだら、あなたの魂はどこに行きますか？

屋根の破れを修理するために、日曜大工か何かで梯子掛けて、てっぺんまで上り切った段階で「あ、間違った所に梯子掛けてた」と分かったら、どんな気持ちになりますか？

もう1度やり直さなければならないので、上の距離が長ければ長いほど、高ければ高いほど、「うわ～、無駄なこととしてしもた。」ウンザリしますよね。

梯子だとやり直しが利くからまだいいけど、人生の梯子の場合ならどうしますか？

死んでみて、「あ、ここは絶対に来てはならない場所だ」と、死んだ後に気が付いても遅いんです。

屋根の修理のための梯子上りなら、もう1度梯子を下りて、正しい所に掛け直してやり直せばいいでしょう。

しかし、“人間は1度死ぬことと、死後に裁きを受けることが定まっている”と書いてあって、死んだ後でやり直そうとしても手遅れなのです。

私たちのスタートはいのちの造り主である神です。

なので、私たちが帰るべきゴールはスタートと一緒になんです。スタートとゴールは一緒。

私たちは家出しているようなものです。羊飼いの元から離れ去ったんですね。

だから、羊飼いの所に帰って、羊飼いの家こそが私の家。羊飼いの所に戻るべきです。

羊が羊飼いから離れて荒野を進んで行ったら、その羊に待っているものは幸せではないんですね。

羊って足遅い。目悪い。牙無い。角は巻き角で武器にならない。しかも肉 美味しい。

まるで、獣に食べられるために存在しているような動物ではありませんか。

それに、大人になって転んだら、自分で起き上がれないんですって。羊飼いに起こしてもらわないと。

つまり、羊飼いと一緒なら非常にタフな生き物だけど、羊飼い無しで、1人でドンドン荒野を進んで行くと、待ち受けているものは滅び以外の何ものでもない。

聖書は“死後の世界は2つしかない。神がおられる世界と神がいない世界。神の国と神の恵みがどこにも見出せない世界”。神がいない世界を地獄と言うのです。

そこは神様が行かせたくない所。行くべきではない所。行ってはならない所です。

神は私たちに、絶対にそこに行って欲しくない。

14. このように、この小さい者たちの一人が滅びることは、天におられるあなたがたの父のみこころではありません。

神様はあなたが滅びることを御心と思っていません。逆です。救われて欲しいのです。

何としても、あなたに救われて欲しいのです。キリストと共に歩んで、胸を張って、良き充実した人生を生きて欲しいと、心から願っておられる方です。

迷っているのは何が分からないのか。

### 3. 今、自分がいる場所が分からない人

どこかに行く時、例えば、駅で下りて駅前の大きな地図を見る時、最初に探すのは現在地です。

現在地が分からなかったら、目的地が分かってもスタートラインが決まらないので、ゴールに辿り着けませんね。

迷っているとは何が分からないのか？

どこから出たのかが分からず、これからどこに向かっているのかが分からず、そもそも今 私が何のためにここにいるのか、今 私の周りで何が起きているのか、今 何のために生かされているのかが分からない状態。これが、迷っているという状態です。

私たちは今 何のために生かされているのでしょうか？

福音を聞くために、そして、神の導きによって新しい人生を生きるためのスタートに着くために、今までチャンスが与えられ、生かされていると思います。

私には 87 歳の母がいます。このコロナ騒ぎで外出自粛が続いていますが、昨年から今年にかけて、何回か母をランチに誘い出しました。家の近所にこじんまりした家を改造した和食レストランがあって、そこそこ美味しいので、母を連れ出してランチに行ったんです。

87 歳。歩くのメッチャ遅いんですよ。一緒に歩いているつもりでも、気許したらすぐに後ろに行ってしまうんです。

実は、私はランチの後に、ラジオのスタジオに収録に行くことになっていて、あんまりゆっくり出来ないというか、私の心の余裕がなかったんです。食事が終わって「さあ、もう帰ろうか。」歩いて 5 分くらいの距離。私の足で 5 分くらい。母の足だと 10 分以上掛かるでしょうね。

「あんな事もあって、こんな事もあって。今度〇〇と会うねん」とか話している時に返事がない。「あれっ？」隣を見たら、いない。「えっ！」後ろを振り返ったら、10メートルくらい後ろをトボトボ歩いているんです。「しまった…。やっちまったぜ」みたいな。私ね、心に余裕がない時、ちょっとまだるっこしいというか何というか、「もっと、はよ歩いてや」という気持ち、ちょっとイライラとする気持ちがあったと思います。

神は私の人生において、1 度でもそんなことをしたことがあるだろうか。

「お前のクリスチャンとしての歩みは、右に逸れたり左に逸れたり、遅々たる歩みで、いつまで我慢してたらいいなや?! もっと、はよ付いて来い！」そんなこと、神は仰らない。

神は私が絶好調のときも絶不調のときも、いつも変わらず、私のすぐそばで見守り、支えて来てくださった方です。

なぜ、そんなことが出来るのでしょうか？この方、余裕あるし。

でもね、私 余裕ある時は親切やと思いますわ。多分。多分。多分。余裕がないと親切に出来ません。しかし、全知全能の神様は余裕あり過ぎ。何だっでご存知。何だっでお出来になる。

この方は愛する私のため、また皆さんのために、その一歩一歩の歩みを、ちょうどヨチヨチ歩きの幼児をお父さん・お母さんが喜びながら見守るようにエスコートする方です。

“私は今、神の働きかけを受けている”ということを知らない時は、絶望的な気分になって「もう、おしまいや！」と思いがすい。それを、迷っている状態と言うんです。

神は目には見えないけれど、私たちのすぐそばにおられて、現に、この YouTube メッセージを通して、皆さんに福音を聞かせておられるのではないのでしょうか。

この方は（ルカの福音書にもこのたとえ話は出て来ますが）見つけたら肩に背負って、羊飼いが羊を連れ戻すんですね。

キリストは何のために来られたのか？私たちの罪を赦すためです。

聖い神が罪を赦すためには、罪の目こぼしをするのではなく、罪の償いをちゃんとした上で、その償いを見て、私たちを赦してくださるのです。

私たちは自分の罪の償いが出来ないので、イエス・キリストが代わりに十字架に掛かって、私たちの罪を背負って、裁きを受けてくださったんですね。

“贖い”は英語で Atonement/アトーン。これは動詞。贖う・弁償する・償う。

Atonement/アトーンメントは名詞。償い。

Atone を ある方が説明していました。「Atone は 2 つに分けることが出来る。At・One。“1 つにおいて・1 つになる”。贖いとは、贖う者が贖われる者をご自分の身に背負い、運命共同体となること。贖われる者の罪を背負い、贖われる者の人生を背負い、贖われる者の存在そのものを背負って、1 つになって父のところに帰ってくださる。」

実に、キリストは今から 2000 年前に十字架に掛かって、私の罪と 1 つになってくださった。

いや、私の存在そのものを背負って、十字架に掛かって死んでくださった。

なので、“クリスチャンは、キリストと共に十字架に付けられて死んだ者である。キリストと共に墓に葬られた者である。キリストと共に 3 日目によみがえった者であると思いなさい”と聖書に書いてあるんですね。

最悪な者と 1 つになったら もう最低だけど、最善の方と 1 つになるのは最高ではありませんか？

キリストはそのように私たちを贖ってくださる方です。

キリストを信じ、自分の救い主として受け入れた者は誰でも、羊飼いが背負って、父の家にまで運んで行ってくださるのです。

昔 話したことがあります、ある外国の花屋さん、ものすごく忙しくて、新米のバイト生がミスしてしまいました。

今まで町の外れで営業していたケーキ屋さんが、チーズケーキがとても美味しいと評判になり、どんどん儲かって、遂に一等地に引越して新しく開店することになりました。ケーキ屋さんのご最良のお得意さんたちがお金を出し合って、「開店おめでとうの祝いの花輪を送ってください。」

もう 1 つ。ハイスクールの女子生徒が事故で亡くなって、「お葬式に葬儀の花を送ってください。」

これはお悔やみの告別の花輪ですね。

この 2 つの花輪の届け先を間違えたんです。

新装開店のお店に葬式花輪。「さあ、これからスタート！」という時に葬式花輪。

ナニ考えてんねん！非常識にもほどがある！平身低頭「すみませんでした」と店長が謝りに行って。

だけど、もっと酷いことやっちゃった。お葬式に開店祝いの花輪。これはもう責任者が謝りに行かないかん。バイト生と店長が葬式会場に謝りに行って「すみませんでした！」

17 歳の娘さんが亡くなって、クラスメートたちもいっぱい来ている。喪主はお父さん。

このお父さんが穏やかな笑顔で、「人間誰でもミスがあるから大丈夫ですよ。それに、この花輪こそ娘に相応しいと思います。」

花輪に何と書いてあったか。“引っ越しおめでとう” 彼女はイエス・キリストを信じていました。

だから、彼女の肉体は地上に残っているけど、魂は引っ越ししたんです。

地上では病気になったり・怪我をしたり・裏切られたり・傷つけられたり・嫌なことをたくさん見な

